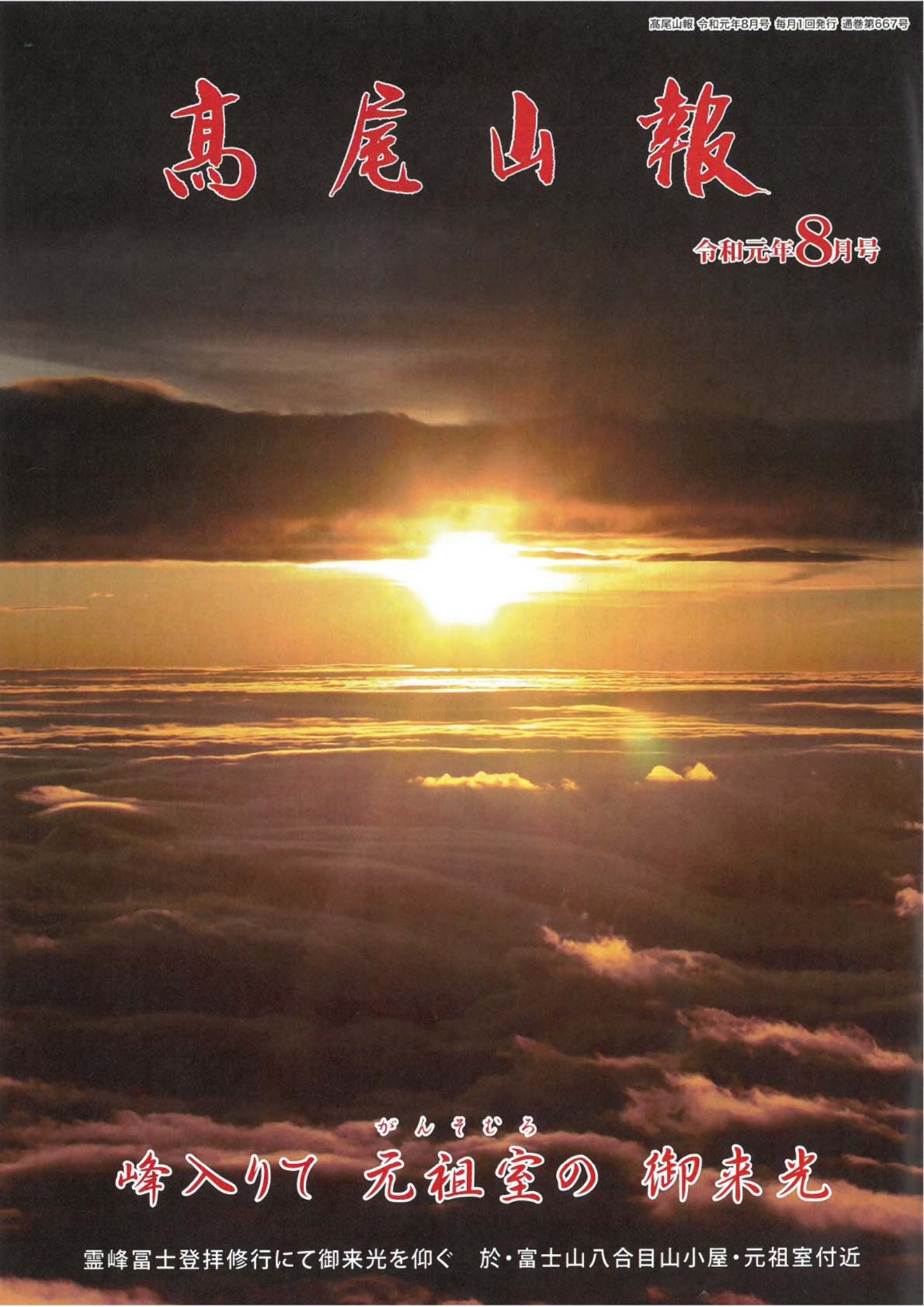
高尾山報 令和元年8月号 毎月1回発行 通巻第667号

高尾山報

令和元年8月号



峰入りて 元祖室（がんそむろ）の 御来光

霊峰富士登拝修行にて御来光を仰ぐ　於・富士山八合目山小屋・元祖室付近

法の水茎 (86)

大正大学講師　髙橋秀城

宵の間の
群雲伝ひ
影見えて
山の端めぐる
秋の稲妻
（『玉葉集』伏見院）

（宵の頃に、群がった雲を伝って光が輝くのが見える。山の稜線をめぐる秋の稲妻よ）

八月八日に立秋を迎えました。まだまだ厳しい暑さが続きますが、少しずつ秋の気配が立ち始めます。立秋前日の七日は、旧暦の七夕でした。夏の最終日に、織姫と彦星は何を語らい、立秋の朝に別れたのでしょう。

冒頭の和歌に詠まれた「稲妻」という呼び方は、稲が開花し実を結ぶ頃に多く起こることから名づけられました。雷は「神鳴り」（神が鳴る）という意味です。稲は神様の雷光と結ばれることによって豊かに実るのでしょう。今年は梅雨時期の日照不足によって、水稲の実入りなど、農作物の生育の遅れも心配されます。実りの秋の五穀豊穣を祈ります。

亡き人の
この世にかへる
面影の
あはれ更け行く
秋の灯火
（『新続古今集』藤原隆祐朝臣）

（亡くなった方がこの世に帰ってくる。そのお姿が目に浮かんで、しみじみと夜が深くなっていく。ご先祖様が宿る秋の灯火よ）

十三日から十六日は月遅れのお盆です。十三日には迷わないようにお迎えをして、十六日にはお見送りします。四十九日を過ぎて、初めてのお盆を「初盆・新盆」などと呼びますが、とりわけ初盆のご先祖様は、一刻も早く家に帰りたいと思われているのではないでしょうか。お盆中は家族水入らずで、心静かにゆっくりとお過ごしいただければと思います。

なお、お盆の精霊棚（盆棚）には、キュウリで作った馬と、ナスで作った牛を用意します。これは、足の速い馬で少しでも早く戻ってきてもらい、帰りは牛に乗って景色でも楽しみながらゆっくり行ってほしいという願いが込められています。私が住まいする地方（栃木県宇都宮市）には、「お盆の黒蝶には仏様が乗って来る」という俗説があるようです（『故事俗信ことわざ大辞典』）。牛や馬の他にも、いろいろな乗り物を選べるのでしょうか。

このままずっとご先祖様と過ごしたいと願っても、お盆の四日間は瞬く間に過ぎ去っていきます。時は止まってくれません。

仏教では「ほんの短い時間」を「刹那」と呼びます。一日は二十四時間（八万六千四百秒）ありますが、「刹那」は、お経によれば一日に六百四十八万刹那もあるそうです（『倶舎論疏』など）。これは、秒数でいうと七十五分の一秒（〇・〇一三秒）という意識されることのない束の間の時間です。ちなみに「刹那」と似た短い時間単位に「須臾」があります。あまり聞き慣れない言葉かもしれません。

キュウリの馬やナスの牛が飾られた精霊棚

こちらは一日に三十須臾あるそうで、時間に換算すると一須臾は四十八分に相当します。このように仏教には、時間を表す言葉がたくさんあります。

短い時間をめぐっては、次のような話があります。

今となっては昔のこと。醍醐天皇（八八五～九三〇）の治世の頃、京五条の道祖神がいらっしゃるところに、実のならない大きな柿の木がありました。その木の上に、ある時俄に仏様が現れました。まばゆい光を放ち、たくさんの花を降らせ、とても貴い様子でしたので、京のあらゆる人が詣でました。それは車も動けず、人も歩むことができないほどの、たいへんな賑わいでした。

その頃、光大臣という人がいました。多くの才能に恵まれたとても賢い方でした。彼は仏が現れたことに対して「本当の仏が、木に現れるのはおかしい」と不審に思い、実際にこの目で確かめようと行ってみることにしました。

着いてみると、確かに仏様がいらっしゃいます。しかし、大臣はやはり怪しく思い、仏に向かって瞬きもせず、一時（二時間程度）ばかり見つめていました。すると仏は、しばらく光を放ち花を降らしていましたが、じっと見つめられていたために堪えきれなくなり、突然烏の鵄の姿に変じました。置も折れて、木の上から地面に転落してしまったのでした。多くの人はこれを見て唖然とするばかりでした。

（『今昔物語集』）

ここに登場する大臣は、瞬きをせずにじっと見つめていたために、仏に化けていた魔物の真の姿を見破ることができました。瞬き一回に要する時間は、〇・五秒前後と言われます。多くの群集は無意識に暗闇の時間を作っていたのでしょう。それを知って人々を化かしていた鵄も見事とは思いますが、刹那の時も休むことなく、ずっと見開いていた大臣の目は欺くことができなかったようです。

あっという間のお盆の日々も、刹那を思えば長く感じられるでしょうか。夕立の閃光に刹那を思い、ご先祖様やご家族と過ごされるかけがえのない時間を噛みしめていただきたいと思います。

（栃木北部教区普濟寺）

真言宗智山派管長 総本山智積院化主 第七十二世 大僧正 布施浄慧猊下 初登嶺

去る七月八日、好天に恵まれた総本山智積院に於いて、真言宗智山派管長、総本山智積院化主第七十二世 大僧正 布施浄慧猊下の、初登嶺の儀が厳粛に執り行われました。

初登嶺の儀とは、新しい管長猊下が就任後、初めて入山することです。管長猊下は金堂をはじめ、山内の各諸堂を参拝された後、講堂にて就任式に臨まれました。

川崎大師の藤田御貫首、成田山の岸田寺務長と並び、當山菅谷執事長はじめ、宗派諸大徳、関係者が見守る中、式は無事に執り行われました。

初登嶺に臨まれる布施猊下

金堂前における記念撮影

第十三箇度 霊峰冨士登拝修行

七月二日(火)～七月八日(月)

一行の参籠した五合目の山小屋・佐藤小屋にて法楽を上げる

七月二日より七月八日迄、今回で第十三箇度となる霊峰冨士登拝修行が行われた。

初日には前行として蛇滝にて滝行を修し、自動車祈祷殿広場において修行の無事を祈願する柴燈大護摩供を厳修した。翌日の早朝、大本堂における大護摩供修行では修行満足と道中安全が祈願された。

その後、高尾山冨士浅間社にて出立式が行われ、願文の読み上げと、先達への梵天袈裟のお授けが行われた。

高尾山頂から富士吉田市までの道中では、梅雨の影響による天候不順に見舞われながらも、富士山頂を目指して徒歩練行が行われた。

冨士山を登る道中では不動石という大きな石を持ち上げることで、自らの罪業の重さを量る「業秤」を始めとする十界修行を行いながら登山を続けられた。

最終日の八日未明には御来光を仰ぐべく、参籠所であった八合目の山小屋・元祖室に隣接する烏帽子岩神社の社殿に向かった。当初は雨の予報であったが、この日は天候に恵まれ、眼下に見える雲を押し上げて昇り来る御来光を拝し、山頂法楽及び御来光法楽を行った。

下山後には、北口本宮冨士浅間社に参拝して高尾山に帰山。自動車祈祷殿において、登拝修行の成満を祝して柴燈大護摩供を厳修した。

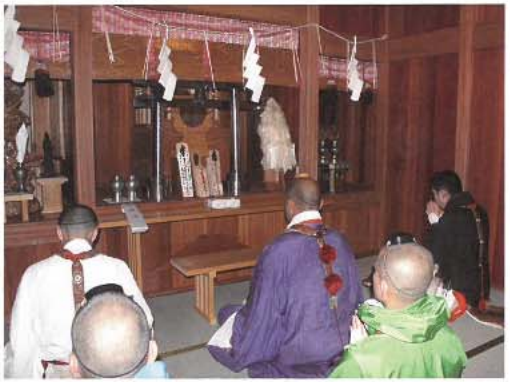
一行は無事の修行成満を喜ぶと共に、来年も再び登頂することを胸に誓い修行を終えた。

※本年は昨年の台風の影響により、冨士山頂付近の石積みが崩れて通行できなくなっていたため、登拝行当時は吉田口登山道（山梨県側）が規制されており、山頂まで登ることが出来なかった。（現在は規制が解除されております）

高尾山より徒歩練行を行う

己の罪業の重さを思い知る「業秤」の修行

前行として滝行を修す



烏帽子岩神社において法楽をあげる

高尾山冨士浅間社で出立式を行った後、山内僧侶の見送りを受けて冨士山麓を目指して出発

葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉙

明治大学博物館　外山　徹

祈祷所の終焉

嘉永六年（一八五三）九月、病を得て隠居した二二世秀仙に代わり、二三世秀盛が山主の座に着いた。秀盛在住の時期は、この年六月のペリー来航から続いて、幕末維新という波乱の時代と重なる。

関係強化への働きかけ

すでに述べたように、嘉永六年の十一月から翌年九月八日にかけて、ほぼ休む間もなく紀州家からの依頼による祈祷がつづいた。天保期に次いで、紀州家との関係を記した由緒書が作成されたのが十月のこと。また、同月には紀州家から寄進された祠堂金銀の利息をもって堂宇の屋根を修復することを届け出ている。この文面の中では、六代藩主宗直が寄進した本尊不動明王像の葵紋付の厨子修復が述べられるなど、紀州家との深い関係がアピールされている。

そして十一月にはこの間の祈祷依頼に対する報恩の八千枚護摩供を執行することを届け出るなど、九月の祈祷終了後は薬王院の側から盛んに働きかけがなされるようになった。翌年三月には八千枚護摩供結願の護摩札献上、さらに翌安政三年（一八五六）九月にも結願の護摩札献上とつづく。寛政一〇年（一七九八）の正月以来となる正・五・九の配札はつづいていたが、薬王院としてはさらなる関係の強化を意図したのだろう。

特に八代藩主重倫の時代において、藩主から直々の書状が届き、江戸藩邸の御用人との間に頻繁に音信が交わされていたことを思い起こせば、寛政以降の関係はいささか形式的と言えなくはない。通信の名義も「薬王院」「紀州家役人中」と肩書のみであるように事務的なやり取りというニュアンスが強い。かつて隠居湛玄、用人浅井庄左衛門といった実名でのやり取りがなされていた頃とは雰囲気に大きな違いがある。

和歌山藩十三代藩主慶福は、病弱であった将軍家定の継嗣に指名され、安政五年（一八五八）十月、十四代将軍に就任し、名を家茂と改めた。一方、紀州家の当主は、支藩の伊予西条から松平頼久が十四代藩主に迎えられ、将軍家茂の片諱を授かり茂承を名乗った。

この家茂の将軍就任にあたって、諸国の格式ある寺社は将軍代替御礼のため江戸へ出向くことになった。山主秀盛もまた、同年十月に江戸へ出府、一九日に新将軍へのお目見えを果たすと、翌二〇日にはこちらも代替りした紀州家当主茂承へのお目見えを願い出た。この代替御礼の出府にあたっては「大名・旗本へ諸寺院よりお会い願い差出しそうろう向きもこれ有り」ということだったが、西条から移って間もなくのことであり、追って沙汰をすると書面受理に止まった。

翌安政六年付の「東都賦札帳」には「大箱札紀州様　右御初穂正月相済」と記されているので、祈祷料の奉納を受けての定期的な配札のやり取りは、藩主交代後も引き続きおこなわれていたことが分かる。

最後の音信

万延二年（一八六一）三月三日からの両国回向院における出開帳を控え、一月、薬王院は紀州家から寄附を受けた葵紋付の品々を霊宝として開帳場へ飾り付けたいのでお届け申し上げること、また、文政四年（一八二一）における新宿太宗寺出開帳の節の御奥定心院その他女中衆による代参を先例として今回も代参をお願いしたい旨の書面を紀州家に送っている。

これに対し紀州家からは、葵紋付の品々が寄附された年月、これまでも願い出に対し許可を得て飾り付けをしてきたのか、奥女中の代参についても願い出を聞き届けられてきたのかという問い合わせがあった。その返答としては、寛政三年（一七九一）の湯島出開帳の際は特に届け出はせず、新宿の節は修復を願い出たが藩主在国中ゆえ間に合わず、特に届け出をせずそのまま飾り付けたが、「近年不沙汰に御紋附類あい用い手違いに及びそうろう向きもございそうろう旨あらあら承り及びそうろう」と、先例にかかわらず念のため届け出たこと、女中代

参のことは別段願い出はしていなかったが代参があったと回答している。

「念のため」とは、文政出開帳の後、幕府が葵紋付の品を使用することを規制し、天保七年（一八三六）に提灯に合印を貰い受けたという経緯もあってのことだろう。別紙「覚」では、紋幕・提灯類の内訳を掲げ、宝暦五年（一七五五）に寄附を受けた際に御用掛りの佐野伊左衛門から護摩供の際に用いるようにと言われたものであること、六代藩主宗直寄進の根来山興教大師作不動尊を本尊として開帳場に安置することを述べている。この返答書が薬王院文書に残る紀州家との間の最後の音信となる。

薬王院文書の中では紀州家との最後のやり取りとなる書面の一つ

祈祷所の終焉

開国後、幕府の外交方針に反対する尊王攘夷派の活動は、安政の大獄と呼ばれる弾圧にもかかわらず活発化する一方だった。元治元年（一八六四）八月に尊攘派公卿が失脚（八月一八日の政変）すると、尊攘派の急先鋒であった長州藩の在京兵力が挙兵（禁門の変）した。幕府はこの鎮圧に続いて長州藩へ派兵（第一次幕長戦争）。一度は屈服した長州藩だったが、高杉晋作らの挙兵を機に盛り返す。第一次派兵では大坂警衛を務めた和歌山藩だったが、慶応二年（一八六六）の第二次派兵では藩主茂承が征長先手総督に任ぜられ中国地方へ出兵した。近代的な装備による長州藩に敗北を喫した上、この時の戦費は大きな財政負担となってのしかかり、かつて天明の頃におこなわれたのと同様、家臣の家禄を半知借り上げのやむなきに至った。七月、将軍家茂は大坂城で病死。翌慶応三年十月に大政奉還。江戸幕府にも終局の時が訪れた。

明けて慶応四年の正月、旧幕府方勢力による薩摩藩討伐を契機に鳥羽・伏見の戦いが発生。和歌山藩は朝廷に恭順の意を表するが、落ち延びてきた幕府方の敗残兵をむげにもできず、その保護や逃亡ほう助の責を問われて立場を悪くした。

旧幕府勢力の討伐に着手した新政府の東征軍は、三月には関東へ入り江戸を指呼の間に着陣した。すでに前年には薩摩藩の手の者によるテロやその報復による薩摩藩邸焼き討ちなど、江戸は騒然とした状況にあったが、ここに来て戦争前夜の緊迫した状況を迎えた。

江戸城無血開城の交渉も大詰めを迎えた四月八日、政府は諸藩に対し藩邸を引き払って江戸在住の藩士を国元へ帰すよう布達した。和歌山藩は五月三日に東征軍参謀から江戸藩邸引き払いの督促を受け、藩士は六月中旬までに順次退去して行った。このような状況では五月の配札もままならなかったか、あるいは五月の配札が藩邸への最後の配札となったかもしれない。

この年の七月、高尾山第二二世秀盛入寂。三月九日には東征軍の一隊がものものしく高尾山のすぐ脇を通過していた。そして、江戸開城。葵の権威は失墜した。すでに新政府によって神仏分離令が発せられており、これは高尾山の信仰形態を根本から否定するものだった。これまで築き上げてきた体制が崩れ落ちる衝撃は大きかったに違いない。

《参考文献》『和歌山県史』近世（一九九〇）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

八王子・南大沢交通安全協会主催（七月二十七日）

八王子交通安全 火のまつり

於・ダイワハウススタジアム八王子（富士森公園野球場）

阿字門に入る大祇師の菅谷執事長

交通安全協会の皆様の出迎えを受ける

道場内の魔を滅する「宝剣の儀」

道場内を浄める「宝弓の儀」

多くの方々の諸願成就が込められた、撫で木が火中に投ぜられ浄煙となる

オリンピック金メダリスト

三宅義信さん 御護摩修行に来山

七月五日、重量上げで東京オリンピック（一九六四）、メキシコオリンピック（一九六八）で連覇された三宅義信さんが、梅雨空の高尾山に来山されました。

三宅さんは現在、NPO法人の「ゴールドメダリストを育てる会」の理事長を務められております。今回は御護摩供修行にて、自身が指導する選手の必勝成就を祈願されました。

御護摩供の後、山麓の不動院にて大山御貫首と親しく面会されました。

大山貫首と記念撮影する三宅義信さん

一心に丁寧に

第三十八回 高尾山写経大会

七月二十八日（日）、梅雨明け直前の高尾山で、第三十八回高尾山写経大会が有喜閣大広間に於いて開催され、百名以上の方々が参加された。

参加者は写経大会の開会式に際し、山内の僧侶と共に般若心経を読誦（どくじゅ）し、その後一文字一文字に仏さまを感じて丁寧に写経されていた。

昼食の後、午後一時から八王子市の妙薬寺住職で、国際教養大学特任教授を務め、高尾山報に「観音菩薩の宗教」を連載中である金岡秀郎先生により、「お不動様について」と題した講演が行われた。

金岡先生による法話『お不動様について』

一文字一文字を丁寧に書いて般若心経を写経する

観音菩薩の宗教 ⑳

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

空也上人の観音信仰

大乗仏教には多くの仏・菩薩や明王などが尊崇され、そのなかには特定の仏国土と結びついた尊格が少なくない。仏国土とは仏の住する世界のことで、浄土とほぼ同義である。釈迦如来の浄土はわれわれの住む娑婆世界であったが、それ以外の世界に住する如来や菩薩も多い。こうした尊格を「他の土地に住む仏」の意味で「他土仏」という。他土の中でも極楽は、もっとも広く信ぜられた浄土であり、阿弥陀仏はもっとも深く尊崇された他土仏といえよう。

日本における諸宗の教勢を寺院数から見ると、浄土系が第一位である。浄土系とは浄土宗・浄土真宗・時宗・融通念仏宗などを指し、その教えの中心は、念仏により極楽往生をかなえることにある。念仏とは「南無阿弥陀仏」と唱えることで、阿弥陀仏に帰依することを意味している。極楽は『阿弥陀経』に「これより西方、十万億土の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という」とあるように、果てしなく遠い西にあるとされた。阿弥陀仏の導きにより、死後、「極楽に往って生まれる」ことが極楽往生である。浄土系信者が多いということは、阿弥陀信仰により死後の極楽往生を願う人々が多いということである。これにより、「浄土教＝阿弥陀信仰」の図が定式化した。しかし、浄土思想を説いた『仏説無量壽経』『仏説観無量壽経』によれば、観音菩薩は慈悲の心から阿弥陀仏への橋渡しの役割を持つとされた。そのため浄土系の諸寺院には、しばしば本尊の阿弥陀如来とともに観音菩薩が祀られている。

観音菩薩と阿弥陀仏の関係は、阿弥陀三尊という仏像の形式によく現れている。そこでは主尊に阿弥陀仏を祀り、中尊から見て左脇侍に観音菩薩、右脇侍に勢至菩薩が配される。日本では、中尊寺金色堂の阿弥陀三尊像など著名な作例が多い。阿弥陀三尊像は仏像のみならず、尊格を象徴した種字といわれる梵字を刻んだ板碑によっても広まってきた。阿弥陀三尊では、勢至菩薩が阿弥陀仏の智慧を象徴する一方、観音菩薩は阿弥陀仏の慈悲を象徴するとされる。したがって観音菩薩を尊崇することは、同時に阿弥陀仏の浄土への往生を祈願することにもなった。

平安時代の空也上人（九〇三～九七二）は、阿弥陀仏とともに観音菩薩を信心した代表的な人物である。空也といえば阿弥陀聖といわれ、「南無阿弥陀仏」と唱える口称念仏を最初に広めた高僧とされるだけに、弥陀信仰一筋のような誤解を受けやすい。ことに六波羅蜜寺に蔵される空也上

観音菩薩は慈悲の心から阿弥陀仏への橋渡しの役割を持つとされた（高尾山薬王院・延命観音立像　2001年）

人像は、口から唱えた念仏の六字がすべて阿弥陀仏の姿になっており、学校の教科書などを通じて多くの人の記憶に刷り込まれている。身分の上下にかかわらず念仏を広め「市聖」と呼ばれたことは多くが知ることであり、「空也＝弥陀の信者」は日本仏教史の常識となってきた。

しかし、空也が建立した京都の六波羅蜜寺の地は地蔵尊とも縁が深く（拙稿「地蔵尊の宗教⑧」『高尾山報』二〇一七年六月号）、堂内には重文指定された二体の地蔵菩薩像も祀られている。空也が阿弥陀仏のみならず地蔵尊を重んじていたことは疑いない。それのみならず、空也はさらに篤い観音信仰を持っていた。

名声の広まりに比して、空也の史実を伝える資料は少ない。そうした研究上の困難のなか、空也の研究家である石井義長は多くの業績を上げてきた（『空也上人の研究その行業と思想』法蔵館、二〇〇一年、『阿弥陀聖空也念仏を始めた平安僧』講談社選書メチエ、二〇〇三年など）。ここでは主としてそれらの研究に基づきつつ、空也の生涯と観音信仰を見てみよう。

空也の事跡を伝える書には源為憲の『空也上人誄』や慶滋保胤『日本往生極楽記』があるが、本人が自己を語らぬため詳しいことはわからない。一説に後醍醐天皇のご落胤ともされている。空也は延喜二二（九二二）年、尾張国分寺で出家し、沙弥・空也となった。沙弥とは正式の戒律を受けていない若き見習い僧のことである。天暦二（九四八）年、天台宗の延暦寺で天台座主の延昌を戒師として得度受戒し、正式な大僧となった。

この時代、僧侶になるには高度な能力が要求された上、厳密な手続きが必要だった。まず、沙弥が属する寺から僧尼を管理する役所である玄蕃寮と治部省に推薦され、そこから中央政府である太政官に申請されて、許可されると得度者に度縁と呼ばれる許可証が交付された。一年に許可される僧侶の人数は宗派や寺によって決められており、極めて狭き門だった。その上、僧侶になれば厳しい戒律を守らねばならず、奈良・平安時代の出家者はスーパー・エリートであった。通常、こうしたエリートは大きな寺院に属し、研究者として社会の上層部にあって、庶民との接点が少なかった。しかし空也は難関の選抜を経てエリートの道を保証されたにも関わらず、市井の六原を拠点に庶民救済に当たることを生涯の使命とした。六原は屍体の投棄場であった鴨川と葬送の地である鳥野辺の中間の地で、社会の底辺で苦しむ衆生が生活する土地であった。ここに地蔵堂があったと伝わるのも、堕地獄の衆生を救うためとされる。空也が僧侶となった前年の天暦元年には、平安京に疫病が流行し、村上天皇や先帝の朱雀上皇も罹患した。朝廷は貧窮者に米や塩を配給したが、さらに鴨川が氾濫するなどして、もとより貧しい六原界隈はまさに生き地獄であった。

心を痛めた空也は、多様な人々に勧進して十一面観音の造像と『大般若経』書写のための事業を始めた。天暦五年のことである。弥陀の信者にして念仏の創唱者である空也が、衆生済度のために観音像の建立を志したのは、弥陀の功徳と観音の慈悲を一体と見たからとされている（石井義長前掲書）。さらにいえば、如来である阿弥陀仏より、菩薩である観音様のほうが衆生との接点が近いと考えたからではなかろうか。虎関師錬の仏教史書『元亨釈書』（一三二二年）には、「五年には京畿に疫病が流行し、屍が相枕する有り様であった。空也はこれを憐れみ、自ら十一面観音像を刻んで祈った。像が完成すると疫病も止んだ」（石井義長訳）と記されている。同年、空也自身が作った観音像が完成し、六原の道場で造像供養がなされた。こののち道場は西光寺と命名され、空也はそこに入滅まで住したとされる。天禄三（九七二）年、七〇歳で空也は示寂、五年後に弟子によって西光寺は六波羅蜜寺と改名された。六原を大乗仏教の徳目である六波羅蜜と改めたものである。そこには今日に至るまで空也造立とされる各像が祀られ、本尊の十一面観音像（国宝）は十二年に一度開帳される秘仏として今なお人々の尊崇を集めている。

高尾山慶賛会研修会
「高尾山に親しむ会」開催

去る七月十九日、高尾山慶賛会の研修会として「高尾山に親しむ会」が開催されました。この研修会は、これまであまり知られてこなかった高尾山の文化や歴史を紹介することで、高尾山との御縁を更に深めて頂く趣旨のもと行われ、およそ四十名の方々に御参加頂きました。

当日はケーブルカー山上の高尾山駅を始点として、先達の佐藤教務部長により境内各所の案内が行われ、普段は公開されていない御本社・飯縄権現堂内では、「廣大光明」と書かれている、東郷平八郎元帥揮毫の扁額が紹介されました。続いて大本堂において高尾山の縁起や御本尊様についての法話が行われ、御護摩供修行に参列されました。

その後、「高尾山ビアマウント」に会場を移して懇親会が行われ、参加された皆様で和やかにお話されておりました。

東郷元帥揮毫の扁額のある飯縄権現堂内

先達の境内案内に参加される皆様

慶賛会 入会のすすめ

もともと仏教語で「慶賛」とは、仏教寺院、堂塔などの新築、修繕を祝賀する意味でありますが、**高尾山慶賛会**は、高尾山古来から伝承された年中行事を賛助し、御本尊・飯縄大権現様を尊信し、地域社会の親睦を図ることを目的としております。

高尾山は現在ミシュラン三ツ星を頂き、**『心のふるさと祈りのお山、世界に冠たる高尾の自然』**と称せられ、多くの参拝者が来られています。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう祈念するものであります。

年会費　一口五千円

詳細は高尾山慶賛会事務局にご連絡下さい。

○四二二六六一一一一五

侍衣装を着た慶賛会の皆様

待ち遠しい夏

シャンソン歌手　友納あけみ

雨雲に隠れたまま、今年の夏はなかなか姿を見せてくれません。梅雨寒の日も続き、何か暦が止まってしまったようです。真っ青な空！モクモクの入道雲！あのジリジリの強い陽射しさえ、待ち遠しい気分です。

わが家のベランダから勝利八幡神社の高い大きな木が見えます。歩いても一分ほど！境内には天照大御神も祀られていて、千年以上の由緒ある神社だそうです。引越してきた二月は木々は丸坊主ひっそりとしたお宮でしたが、今は青々と若葉が生い茂り、境内をぐるりと取り巻き、小さな鎮守の森のようになっていて境内は木々が作り出すのか、ちょっと別世界、清らかな空気に覆われています。

お散歩の途中に必ずお参りするのですが、先日、立ち寄ると雅楽が聴こえてきて、振り返ると小さな舞台で舞のお稽古が！掲示板には「夏越の祓い」との貼り紙を見つけました。どこかで聞いた覚えもあったのですが、ちゃんと知らなくて、境内にいらした宮司さんにお話しを伺いました。一年のちょうど半分、六月三十日に身に付いた穢れを祓い、無病息災を祈る為、茅の輪をくぐり、人形（人の形に切った白紙）で体を拭い、最後にフーっと息を吹き掛け、身の穢れを移しお納めし、祓ってもらう、古からの行事だそうです。

今年は初体験しました。このお宮ができて千年以上の間、この地に生きた人々が何代も何代もずっとお祓いを受けてきたと思うと何か不思議な思いがします！この地に来てから自然はとても身近なものになりました。こうして古くからの行事に触れあえるのも大きな悦びです。

窓越しに見える畑一杯に玉蜀黍が小さな実をつけました。雨が運んでくれる柔らかな土の匂いは大好きですが、もう雨もたっぷりと吸い込んだ玉蜀黍たち！そろそろ陽射しを恋しがっているようです。

撮影・髙岡輝幸氏

高尾山お施餓鬼大法要

七月十二日　於・山麓不動院

盆迎え火　先師墓地参り

七月十三日

おはなし散歩道

蓮の傘

八王子市　池田美絵

昼になっても雨は止む気配がなく、いっそう激しくなってきた。遠くで雷鳴も鳴っている。早めに田の仕事を切り上げ、次郎がお地蔵さまの前を通ったときのことだ。腰の曲がったおじいさんが、一人で祠の軒下で立っている。こんな雨の日に何をしているのだろう。

「だれか、待っているの」次郎がいぶかしがって尋ねると、おじいさんはもごもごと口を動かすだけだった。しかし、年寄りを見過ごすわけにもいかない。次郎はおじいさんの耳に口元を近づけ、再度尋ねた。おじいさんは、「迎えを待っている」と、かぼそい声で応えた。

「お迎えの人が来るんだね」。次郎が繰り返すと、おじいさんはうなずいた。次郎は安堵したが、せめて迎えの人が来るまでの間、体が濡れないようにと思い、自分が身につけている笠と蓑を脱いでおじいさんに着せた。

「気をつけて」。次郎はおじいさんに声を掛け、大雨の中、家に向かって駆け出した。ひときわ大きな蓮の葉を一本もぎとり、それを傘の代わりにした。

「ふーっ」。木戸を開けて、次郎は大きく息を吐いた。びしょびしょになった体を拭き、着物を着替え、蓮の葉は木戸に立てかけた。

半時ばかり休んでいただろうか。ふと、蓮の葉のくぼみに雨水がたまっていることに気がついた。枝を揺すると雨水もころころと揺れる。面白がって揺らしていたが、この葉っぱが雨を受けてくれたと思うと有り難い気持ちもわいてきた。

「このまま捨ててしまうのも惜しいな」。次郎は葉にたまった水をすすってみた。蓮の葉に酒を注いで飲むと健康・長寿になると昔、聞いたことがあったからだ。するとどうだろう。口の中に甘美な味が広がる。雨水が酒に変わっていた。

「なんかいい気持ち…」。雨で冷えた体がポカポカと暖まってきた。そして、急な睡魔に襲われるとそのまま寝入ってしまった。

その晩、雷鳴が轟き、大粒の雨が次郎の家の屋根にも容赦なく打ちつけた。次郎はそれに気づかないほど深く眠っていた。

翌朝、寝床に差し込む強い光で、次郎は目を覚ました。ぐっすり眠ったおかげで体の隅々まで力が漲っている。次郎は外へ出て大きな伸びをした。稲の葉についた水滴がきらきらと光っていた。

「さあ、始めるか」。次郎は自分に気合を入れ、田んぼの草とりを始めたが、ふと手を止めた。昨晩の不思議な出来事を思い出したからだ。

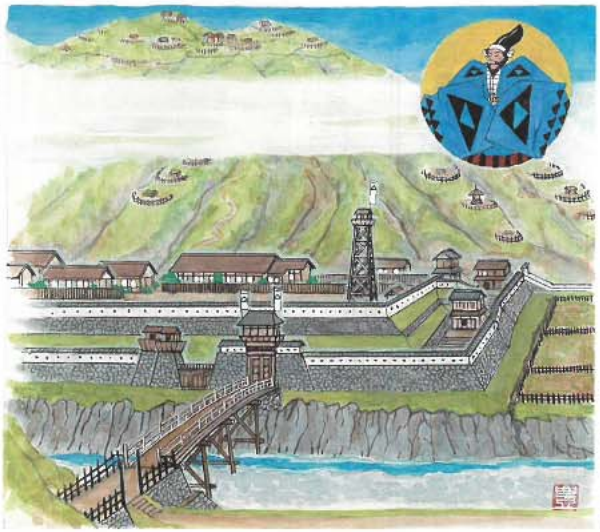
「おじいさんに親切にしたから、お地蔵さまからご褒美を頂いたのかもしれないな」。次郎は手を合わせた。以後も精進し、おいしい米を実らせたということだ。

（さし絵・小出茂）

高尾山物語 16

八王子城築城

絵・橋本豊治



八王子城

八王子城は、現在の八王子市元八王子町の深沢山に築城された山城である。落城後に廃城となったが、御主殿付近の復元など、八王子城跡として整備されており、「日本百名城」にも選ばれている。

甲斐武田氏との合戦の後、北条氏照は国境防衛のため、新たな拠点の必要性を感じた。氏照が選んだ地は深沢山であった。

この山は甲斐国から八王子までの二つの街道の要所、すなわち小仏峠を通る現在の甲州街道と、和田峠を通る現在の陣場街道の中間に位置する。

築城は深沢山周辺の防衛拠点整備から進められ、天正十年（一五八二）頃に居城を八王子城に移し、その数年後には築城が完成したとみられる。

八王子城の名前は深沢山に祀られていた「八王子権現」に由来する。

尚、「八王子」の名称が初めて使用されたのは、高尾山薬王院文書の北条氏照の制札の一部にある「八王寺御根古屋」が、現時点における確実な初出と見られている。

意欲勇気と
やる気を持って
歩む人生
悔いはなし

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時（於大本堂）
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

折り折りの記 (120)

慰霊なる華やかな花火大会

波多野　重雄

八月二日の八王子空襲の犠牲者の御霊を清めるかのごとく、富士森公園運動場の市内花火大会は大きな枝垂る菊の花などの花火が、七月二十七日の夜空を飾る。

想えば、昭和二十年八月二日未明、B29百数十機が「鶴見、川崎、長岡、水戸、富山、立川、八王子」を爆撃し、焼夷弾攻撃。高尾山にも落下。旧市街地は見る間に火の海と化した。

旧市の九十九万坪、戸数八十二%が消失した。三日、四日、五日は、P51の銃撃戦。特攻「隼」の友は、一万米を飛ぶB29への応戦は七千米が限界と語った。八月六日、広島に原子爆弾。八日にソ連宣戦。九日、長崎の原爆。八月十三日に艦載機の攻撃に被害を受けた。八月十五日終戦。同時に家に煌々と灯が点る。

（高尾山健康登山の会会長）

遊雨引山弁天池

厚木市　荒井　一雄

大正三色雄大動
昭和三色流麗泳
黄金開口吸我指
紅白鳥鯉遅遅静

ゆったりと
泳ぐ緋鯉と遊ぶとき
『輪廻転生』ふとおもうなり

雨引山の弁天池に遊ぶ

大正三色（緋鯉の一種）は雄大に動き、
昭和三色（緋鯉の一種）は流麗に泳ぐ…
黄金（錦鯉の一種）は口を開け
我が指を吸ひ、
紅白（緋鯉の一種）・鳥鯉（黒き鯉）
は遅々として静なり…

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
寒蝉鳴
「ひぐらしなく」
八月十二日～八月十六日頃

「寒蝉」とは、秋に鳴く蝉のことで、ヒグラシやツクツクボウシのことを指しています。

高尾山においても七月下旬の早朝や夕方になると、ヒグラシの「カナカナカナ…」という、季節の移ろいを感じさせる鳴き声が聞こえてきます。

今月の風物詩
迎え火・送り火

迎え火とはお盆の際に、先祖の霊が迷わすに帰って来られるように道標として焚く火のことで、送り火は逆に、帰ってきていた先祖の霊が、無事にあの世へと戻れるように願って火を焚きます。

また、地域全体で送り火をする地方もあり、特に「京都五山送り火」が有名です。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

七十九段　人のことをあまり羨ましがるな

他人に対して「羨ましい」と思うことは、「嫉妬心」につながることがあります。大切なことは、自分の現状を受け入れて「人は人、自分は自分」と考えて、必要以上に比較しないことです。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ……百円

高尾登拝五千回を達成して

八王子市　弓立　昭彦

願叶輪潜の前に立つ筆者

私が高尾山の健康登山と出会ったきっかけは、平成十七年の二月三日、薬王院の節分会の豆まき式に参加した際、隣にいたご夫婦から健康登山を紹介されたのが始まりでした。

それから六年間、仲間達と共に暑さ寒さに負けず高尾山に登りました。

そして平成二十三年二月、二十一回の登山で一冊の成満となる『高尾山健康登山の証』の百冊成満、すなわち、二千百回目の登山を達成致しました。

当初の目標を達成した後、次の目標を二百冊に向けてスタートしましたが、『高尾山健康登山の証』は百冊迄だったので、登山だけを目的とするのでなく、自然界に咲く山野草を求めて小仏峠まで足を運んだり、また朝の一瞬しか見ることのできない、日の出をカメラに収めながら六年が過ぎて、平成二十九年四月に四千二百回目の登山（健康登山の証二百冊成満に相当）を達成致しました。

私は朝早くから高尾山に登っており、時々夜行性の動物と出会います。一番多いのは、薬王院に住んでいるムササビです。その他、猪・狸・穴熊・テン・ハクビシン・リス等に出会いました。

昨年の四月には、念願であったスカイツリーの向こう側から昇る日の出をカメラに収めることが出来ました。

そして本年、令和元年六月二十七日に、薬王院の僧侶、職員の皆様の温かい激励のお陰で、めでたく五千回目の登山を達成することが出来ました。登り始めて十四年五カ月、ときには台風や大雨、それによるがけ崩れや倒木、大雪といった自然災害が発生したことも有りました。

健康登山をされている方、また、これからしようと考えている皆様、百冊成満は通過点です。健康のために無理のない登山を続けましょう。

スカイツリーの向こう側から昇る日の出（撮影・弓立昭彦 氏）

第百十七回　高尾山信徒峰中修行会　十月十二日(土)～十三日(日)

【高尾山信徒峰中修行会】を十月十二日～十三日に開催します。

高尾山に広がる大自然全体を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行の方法を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？

当山独自の滝行、般若心経を唱え続ける千巻経、講習会等も実践いたします。

老若男女を問わず初心者の方も歓迎します。

参加ご希望の方は、ハガキに郵便番号・住所・氏名・フリガナ・年齢・性別・生年月日・電話番号を明記してお送り下さい。（尚、小学生以下の参加は保護者の同伴が必要となります。）

皆様方のご参加をお待ち申し上げております。

＊お電話にての申込みはご遠慮下さい。

＊請書は、申込締切後、発送致します。

日程表

10月12日

8:00	高尾山麓不動院集合・受付
8:30	お授け
9:30	開催式
10:00	回峰行
11:00	両滝にて水行 ※男女で分ける
12:45	両滝道場出立 十一丁目茶屋にて合流
13:45	六凡行開始
15:45	山頂到着
17:00	千巻経
18:15	薬王院坊入
18:45	夕食
19:15	風呂
21:00	就寝

10月13日

5:00	起床
5:30	朝勤・朝作務
7:30	朝食
9:00	講習
11:00	昼食
12:00	下山
14:00	柴燈大護摩供
15:00	閉会式

宛先　〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　高尾山信徒峰中修行会係宛

電話　〇四二・六六二・二二五

FAX　〇四二・六六八四・二九九

申込締切　十月四日(金)

参加費　大人一万五千円　子供一万円(小学生以下)　＊保険料含

申込み後、キャンセルの方は、早めに電話連絡を入れて下さい。連絡なき場合は、キャンセル料等がかかる(発生する)場合がございますので、ご了承下さい。

集合場所　高尾山麓不動院　午前八時集合

服装　運動着　運動靴(サンダル不可)

持参品　弁当(初日昼食分)　雨具(傘不可)　洗面用具、タオル、寝間着、リュックサック　筆記用具　＊お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十一丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルを利用する。

※ケーブルを利用する場合、代金は自己負担になります。

日程　十月八日(火)

行程　山麓不動院→蛇滝コース→蛇滝→仏舎利塔法楽→本堂(護摩修行)→坊入(昼食)→下山(一号路)→不動院着(法楽)→解散

参加費　五千円(昼食代、保険料含む)

集合場所　山麓不動院(八時集合)

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

申込締切　十月四日(金)　〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　大本山高尾山薬王院　八十八大師係

＊電話でのお申込みは承り兼ねますのでご了承下さい。

＊申込締切後に、請書をお送り致します。

高尾山の昆虫 118

ヨツボシケシキスイ

今年は長雨に加え低温が続いているせいか、樹液に集まる虫たちも例年のような賑わいを見せていないように感じます。

そんな中で、樹液の出ている樹皮の隙間に入り込み、スズメバチやカナブンの攻撃を巧みに躱しながら活動している光沢のある甲虫が目に付き、ヨツボシケシキスイです。

子供の頃、この虫を見つけた時は、新種のクワガタを発見したと大興奮したことを思い出します。

実際樹液に集まり、オスは左右非対称の大アゴが発達し、十分クワガタで通用しそうな外見をしていて、異形のクワガタとされるマダラクワガタやマグソクワガタよりよっぽどクワガタっぽい印象です。

ただ上翅にあるクワガタとしては異質な赤いトロピカルな四つの斑紋がキノコムシの仲間を思わせ、クワガタとキノコムシのハーフというところでしょうか。

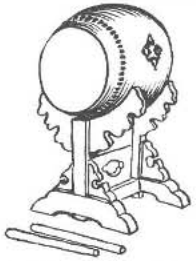
よく似た名のヨツボシオオキスイがいますが、特に大きくもなく大アゴも発達しません。

本種のヨツボシケシキスイ(四ツ星芥子木吸)という名はちょっと気の毒な感じで、名前を変えてあげたい気持ちがします。

（撮影・文　松島　孝）

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

新座市　彰山　粧麗
〃　高橋　久子
府中市　小勝　通康
八王子市　菱山　愛子
〃　高尾山とんとん　むか語り部の会
あきる野市　執行　晃弘
国分寺市　松村　壽子
高崎市　中山　律子
熊谷市　関口　次男
八王子市　小坂　幸夫
〃　酒井　ふみ
〃　真上　房夫
安中市　長岡　功
相模原市　高橋　晃
富里市　森　照森
東久留米市　但馬　憲
足立区　小関　佳子
茅ヶ崎市　椎野　佳子
八王子市　増山　進
〃　設楽　芳子
足立区　中山　恵司
湖西市　鈴木　祥平
高尾山健康登山者一同



院内散歩 30

～薬王院の展示物～

木版画『嵐山雪花』
作・井堂雅夫

訂正とお詫び

先月号十五ページ上段の「高尾山法類会」の記事中にて紹介されました、法類会新人会員に、「埼玉第二教区・閻魔寺・佐藤順與住職」の御芳名を追記させて頂きます。

茲に謹んでお詫び申し上げ、訂正致します。

登山だより

暑中お見舞い申し上げます。

令和元年盛夏

毎日のお護摩奉修時間

(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

交通安全祈願パレード 柴燈大護摩供のお知らせ

九月七日(土)午後二時より
於・山麓不動院出発

入滝指導日変更のお知らせ

蛇滝及び琵琶滝の両水行道場では、第一土曜日を入滝指導日としておりますが、行事日程の都合上、本年の九月に限り**九月七日を九月八日**に日程を変更させて頂きますこと、ご了承願います。

■九月行事日程

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)
五日、十七日、二十九日
弁天様御縁日
八日
仏舎利詣り(仏舎利塔)
十日、十七日、三十日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)
十四日、十五日
聖天堂開扉法要
二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)
二十八日
奥之院開扉法要
(十時奥之院)
月例写経会
(十三時山麓不動院)
二十九日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp